ハスカップ栽培への挑戦

佐々木　昭
（千歳市史編さん委員）

一．ハスカップと由来

私が、最初にハスカップを目にしたのは、かれこれ五十年程前の昭和二十年代末のことである。近所のお年寄りに連れられて、アリ塚の中を足踏みしながら、採りに行ったのが始まりだった。現在のＪＲ南千歳駅東側や、海軍飛行場建設のため新設され、今は空港敷地内となった旧室蘭街道沿線に自生していた。

ハスカップの取れるケヨノミの学名はスイカズラ科スイカズラ属の落葉小低木。花は黄白色、果実は黒青色に熟し楕円形。甘味があり、生食できる。高さ一㍍前後で、枝分かれが多い。分布域は北海道から千島、樺太、カムチャツカ、シベリアに及ぶ。北海道では夕張岳などの高山や釧路湿原、勇払原野に自生する。果実はハスカップと呼ばれる。アイヌ語でハシカップ、枝の上にたくさんなるものによる(註-一)。

年寄りはユノミと呼んでいて、私たちもそれに習いユノミと呼んでいた。

またの名を、アイヌ語で頭の身が長いという意のエノミダニ、それが変化してユノミといわれるようになったとも言われる。甘味に恵まれない昔の子供たちにとってまたとない自然の恵みであった(註-二)。

写真-1　ハスカップ

和名では、クロミノウグイスカグラ（黒実鶯神楽）、六月から七月にかけ、ウグイスの鳴く頃に可憐な花が咲く、その姿が神楽の舞いに通じることからとされる。ハスカップの可憐な花は、エゾノコリンゴと同じころに咲き、アイヌの人たちがマウタチップと呼ぶ北国の初夏の訪れでもある。

二．ハスカップとの関わり

昭和四十年代、千歳市内の中長都の下野一郎、古川定雄や、泉郷の清水修らがハスカップを栽培し、実績を上げていた。五十年代に入ると根志越・祝梅の稲作農家は、転作作物探しに苦慮していた。

昭和五十二年、千歳市農協生産部長になった私は、千歳市農政課長富田健治、千歳市森林組合参事長谷川清二、千歳市農協管理部長木滑康雄らと、美唄の林業試験場樹芸樹木科長の中内武五朗を訪ね、二㌶のハスカップ圃場を見せてもらった。林業試験場で栽培されたハスカップは苫小牧の有名菓子店三星に出荷するなど軌道に乗り始めていた。

この年、千歳市農業改良普及所の所長をしていた平野幸作を嘱託として、ハスカップ栽培を本格的に取り組むことになる。

翌、昭和五十三年四月に四十戸の農家で、ハスカップの里運営協議会(初代会

写真-2　親樹採り（昭和53年）

図-1　旧長都沼

長力示武四）を設立。五月、二十台の車両を動員して、前述の旧室蘭街道脇の航空自衛隊通信所付近の雑木林や、陸上自衛隊東千歳駐屯地の演習場から約一万本の親樹を運び出し、各戸に分散して四～五㌶ほどの圃場ができあがった。

これが現在の大部分の樹の母樹となった。

五十五年頃、平野幸作の後任に留萌管内の農業改良普及所長であった青木宏を迎え、ハスカップの里運営協議会の事務局も併せ持ち、体制の強化がなされる。

五十八年からは農協直轄の苗作りのミストハウス施設を設置し、本格的に苗木の増殖が開始され、優良苗五品種を選抜し、バイオテクノロジー（組織培養）により約十五万本の苗を増殖する。

かつて千歳市街から北東へ九㌔㍍程のところに長都沼があった。広さ三・九平方㌔、洪水常襲地帯であった。昭和二十六～四十四年まで行われた国営灌漑排水事業等の造成事業で九二〇㌶の耕地が造成された。私は、特に昭和六十年から平成八年まで国営ネシコシ地区開発期成会の事務局長として北海道と掛け合い農事組合法人ネシコシ生産組合を立ち上げた。土地改良事業の申請や、土地代金の借り入れ、開発公社との交渉、造成全般にわたる開発局との折衝に奔走した。法人は、旧長都沼跡の土地、一六七㌶を所有することになり、そのうち十八・五㌶にハスカップの木約四万本を植えることになった。

三、栽培と、栽培の断念

農事組合法人の構成は、当初八十四戸。約半分がハスカップ作りに選ばれた。ブロック毎に輪作体系を組み、共同責任とした。

従来、ハスカップのなる木は勇払原野に自生する潅木で、肥料も寒さ対策もほとんど要らないのかと考えられていた。しかし、実際は、相当量の堆肥と追肥が必要だった。また、肥料を吸い込む根がほとんど地表面を這っているので、除草剤はつかえず、すべて、手作業を中心に刈り取る方法しかないことが解った。また、春先もしくは秋口にカイガラムシの防除と花あとにアブラムシの防除は欠かせない。当初、幼樹であったために除草剤と機械除草が可能であったが、次第に木丈が大きくなり、周囲の雑草もはびこり残効性の農薬に頼らざるを得なくなり、とうとう収量にも影響が出始めた。

さらに防風対策では、春からの南風が非常に影響する。本来は樹木が望ましいが、当面は、防風網で対応せざるを得なかった。しかし、雪害のために、融雪前と、後には防風網の開閉が必要となる。

当初から労力のかかる収穫の機械化が大きな課題であった。千歳市農業協同組合の補助を受け吸入式や振動式収穫機を開発したが実用化は難しかった。

収穫にかかる労力のコスト高を吸収できず、法人の理事会としてもハスカップの栽培は断念せざるを得なくなった。

しかし、私には経過からして、どうしてもハスカッ

写真-3　ハスカップ圃場

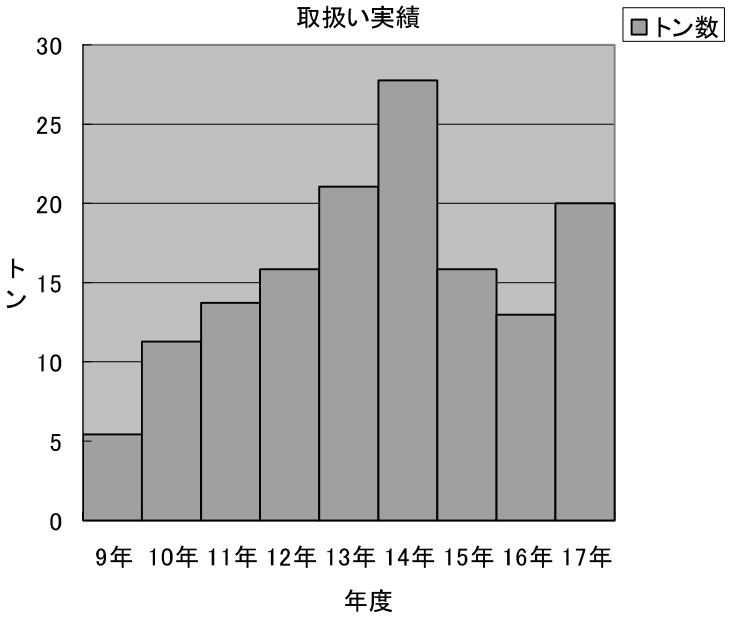

表-1　JA 道央千歳支所のハスカップの取り扱い
（JA 道央千歳ハスカップ生産部会総会資料）

プを葬ることはできなかった。また、国営土地改良事業申請認可をハスカップで得たために、十八・五ヘクタールのうち、二・五ヘクタールを残した。残りの大部分は一般の専業農家が畑作として麦、ビート、豆、スイトコーンなどを作っている。

たまたま、妻が法人の構成員であったことから、平成十二年の農協職員定年を機に、圃場を約六千本、二・五ヘクタールに縮小し管理することになった。

千歳市でのハスカップ栽培状況は、四十戸程で、三十ヘクタール程度が栽培されていると言われる。北海道では千歳の他に美唄市、厚真町、平成十八年に名寄市と合併する風連町等で作られている。

四．ハスカップ文化の高揚と継承

ハスカップの花は一センチメートル位の黄白色の花を二個づつつけ、それが合体して一つの実をつけるスイカズラ科特有の実のつけ方で、別名『愛のちぎり』とも言われている（図-一・二）。実は楕円形、丸いもの、細長いもの等いろいろある。もちろん味も微妙に違う。

ハスカップにはビタミンC、ビタミンE、カルシウム、鉄分、植物繊維が他の果実類より多く、とても身体によいとされてきた。

最近は目の疲れ、視力低下の改善に効果があると言われるアントシアニンが、ブルーベリーより十数倍も多く含有していることもわかり、テレビ番組などで頻繁に報道されるようになった。

最近、圃場に「緑内障が良くなった。今年もぜひ採らせてください」と実が熟するまで何度も下見にこられた方がいた。また、アイヌの人たちが、滋養に高いということで愛用していたことから不老長寿の実とも言われてきた。

前述の肥培管理、収穫作業のコストを考えると、やはり、ハスカップは稀少価値が売りである。従って、薬効・美容・健康食品化等による付加価値アップをねらう食材に仕立てる商品開発が必要であろう。

ハスカップを使った商品としては全日空の機内食にもなった市内菓子店の『ハスカップジュエリー』が有名だが、そのほかジャム、アイスクリーム、ワインと幅広い。また、近年は生でも人気を集めている。

前述したように収穫は、手もぎが主

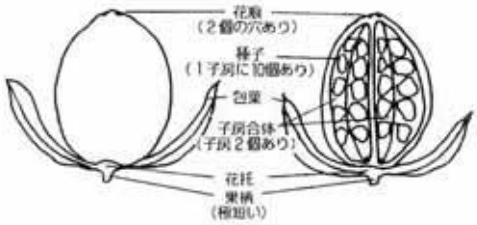

図-1　果実の構造（原図『農家の友』）

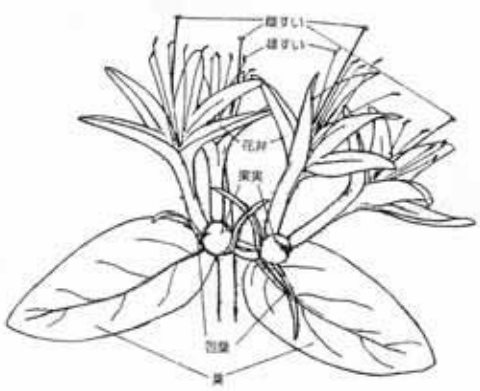

図-2　花の構造（原図『農家の友』）

流。ＪＡ等出荷用の生は作業員などに頼らざるを得ない。しかし、この場合、作業員の労賃がかさみ収益は少ない。

来園者に摘んでもらう観光農園方式だと留守番を置くだけであまりリスクはない。さらにイチゴのもぎ取りを併設するとなお相乗効果がある。

また、摘み取りをする時間的余裕のない来園者のために、作業員が摘み取ったパック詰めを提供できるようにした。

商品開発ひとつをとっても、現在の物量ではいかんともし難い。せめて百トン以上の原材料が確保されなければ、特産化は困難で、さらに面積拡大をし、増産の方向を摸索する必要がある。

昭和五十三年に千歳市の名産品にするべく、栽培を始めた尊い経験と、貴重な資金を投入して得たハスカップを次代に継承する必要があろう。

平成十七年七月、ネシコシ圃場において石狩南部地区農業普及センターが市内の小学生、教員、父兄を対象に食育講座を開き、ハスカップの由来を説明した後に、摘み取りとジャム作りを体験してもらった。

今後もこうした機会を通じてハスカップとその文化を、生産者のみならず、多くの方の協力者を得て、後世に伝えたいと思っている。

（肩書は当時、敬称略）

写真−４　食育講座

筆者とささき農園の紹介

千歳市花園出身。明治四十年頃、宮城県から千歳に移住した開拓農家の三代目。千歳市農業協同組合に三十六年間勤務。定年後、農業に従事。

主な生産物

いちご〇・三ヘクタール、アスパラ〇・一ヘクタール、自家用野菜〇・二ヘクタール、緑肥作物（ひまわり）〇・三ヘクタール、そば〇・六ヘクタール、ハスカップ二・八ヘクタール

ハスカップ圃場と植栽数

あずさ圃場　〇・三ヘクタール　約千本

ネシコシ圃場　二・五ヘクタール　約六千本

（平成十七年度　ＪＡ出荷量　約一・五トン）

註

註・一　高橋　誼　昭和五十六（一九八一）年七月「ケヨノミ」『北海道大百科事典　上』北海道新聞社

註・二　更科源蔵　昭和五十六（一九八一）年七月「ケヨノミ」『北海道大百科事典　上』北海道新聞社

資料

千歳市農業協同組合　平成六（一九九四）年『北海道千歳市特産　ハスカップの歩み』

中島二三一　平成八（一九九六）年「北国の小果実栽培」『農家の友』臨時増刊号（社）北海道農業改良普及協会